

ができるなら、わたしたちは闘い続けることができるだろう。

わたしたちの闘いに、わたしたちの欲望に先験的なタブーはない。壁は越えてもよく越えなくともよい。壁の後ろに真実があると信じてそれを越えようとする人々や壁の後ろに怪物がおりそれを刺激してはならないと信じる人々、この両者は壁に閉じ込められている人々である。最初に壁はない。もし壁というものがあつたら、いつか私たちが闘いを止めたとき、そがそう呼ばれうるだろうか。まだわたしたちはわたしたちの闘っている、そしてわたしたちの楽しんでいる状況のなかにいる。

訳註

- 1 女優「高素榮」の名前にかけたもので（もちろん高素榮本人とは全く何の関係もない）、「高」麗大学、「所」望教会、「嶺」南（慶尚道）地方を指す。李明博自身が高麗大学を卒業し、所望教会に通い、嶺南地方出身であるが、その人脈に依拠した人事を表現したもの。
- 2 女優「姜富子」の名前にかけたもので（もちろん彼女も何の関係もない）、ソウル市の「江」南に所有した土地で儲けた「富者」を指す。これも李明博政府の主な人々が高級住宅街である江南の不動産で儲けた人々であることを表現したもの。
- 3 元々は女性のボディラインを表現する言葉であるが、前「S」eoul市長である李明博が政府人事においてソウル市役所出身者を主に登用したことを表現したもの。
- 4 〈みんな一緒に（다함께）〉は「反戦・半資本主義」を掲げる比較的新しい組織でトロツキスト系組織であるIS（international socialist）の流れを汲む。国際主義を掲げており反グロー運動にも極めて積極的であるが、前衛主義的な傾向が強い。
- 5 この間の動きのなかでnaverを抜き韓国最大のポータルサイトとなったdaumの討論空間。このサイバー討論空間を通して様々な意見が表明され議論がなされている。意見広告のための募金などもこの空間を通して多くなされた。そしてデモの際にも必ずといってよいほど最前列にはアゴラの旗がはためいている。
- 6 全国で百万とも言われる人々が立ち上がった六月十日、ソウル市のどまんなかである光化門交差点などにコンテナが設置され青瓦台方面に向かう交通は完全に遮断された。ご丁寧に壁に油まで塗って登れなくするとともに巨大な太極旗を正面に貼り付けて「聖化」されたこのコンテナの壁に対して付けられた名前が「明博山城」である。明博山城は即座にウィキペディアにも登録され、国宝に指定すべきとの意見などが飛び交ったが、残念なことに翌日撤去された。
- 7 カール・マルクス『フランスにおける階級闘争』のエンゲルスによる序文を指す。
- 8 スラヴォイ・ジジェク／鈴木一策訳『為すところを知らざればなり』（みすず書房、1996）

解説 酒井隆史

いま韓国が熱い。日本で報道されている米国産牛肉の輸入制限撤廃だけが問題なのではない。それは雪崩に拍車をかけたにすぎない。ある高校生のアクションが一つのきっかけだった。「アンダンテ」は大統領弾劾の署名をネット呼びかける。すると燎原の火のごとく、その声は町々を駆け抜け、街頭に溢れだした。そして李明博政権への、それが体現するネオリベ政策への全般的抵抗となった。予兆があったわけではない。数ヶ月前にはまったく予測できなかった、と研究集団スユの面々は語る。しかも、この状況がすでに数ヶ月継続しているのである。そこでは新しい出来事が次々に観察された。オンライン／オフラインの区別の消滅、これもスユの指摘である。人々はノートパソコンとカメラを持って街頭に飛びだし、そこで起きていることを映し撮り即座にアップする。瞬間に伝えられる情勢の映像は人々をさらに街頭へ誘い出す。これはまた、警察の行動を逐一観察し、その不当な振る舞いについてはすぐさまアクションを引き起こす媒介にもなった。警察は監視される対象となったのだ。監視カメラによって注視される対象であった人々は、今度は注視する側に変貌したわけだ。かれらは実にうまく監視カメラの画像を道路の状況を知ることにも活用したのである。それにgoogle earthも。まさに人々はわたしたちを窒息させるべく張り巡らされた眼を逆用し、行動の可能性を探り、実践している。バリケードは民衆の圧力に対して当局が差し出すものになった。名づけがたいこの現象に、「集合知性」という概念が与えられ、今度はそれが人々のなかに拡がっていく。これはアジア・レベルでの、21世紀における本格的な闘争のサイクルの口火を切るものであろうか？

VOL

7.4 2008 No.06

SUYU-NOMO Issue

eight pages

CONTENTS

追放されし者たちの帰還： 2008年キャンドルデモ

高秉權（研究空間スユ+ノモ酋長）

Return of the excluded? Candle demonstration 2008 KO, Byung-Kwon

藤井たけし 訳

Return of the excluded? Candle demonstration 2008 K0, Byung-Kwon

追放されし者たちの帰還： 2008年キャンドルデモ

こびよんぐおん
高乗權(研究空間スユ+ノモ酋長)

藤井たけし 訳

1. 暗い前兆

「最初は何人かがいた。しかし瞬間に黒山の人だかりとなった」(カネッティ『群集と権力』) 大衆とはそんなものである。2008年4月を考えてみても一体誰が予想だにしていたろうか。5～6月にあれほどの黒山になろうとは。誰もがこの事態を予想しえなかったのは、一方ではそれが予定されてたものではなかったからだ。新政府出帆百日でそんなことが予定されているわけがない。しかし他方で、この事態を予想することができなかったのは、それがいつでも起こりえ、いつでも起こりうるものであるからだ。それはベンヤミンの表現のように「未来のあらゆる瞬間は、そこをとおってメシアが出現する可能性のある、小さな門」だからだ(ベンヤミン「歴史の概念について」)。

結局問題は前兆である。いつ稲妻が走るか確定することはできないが、われわれみな山に背に重い雲が寄り集まっていくのを見ていた。ニーチェのツァラトゥストラは「過ぎ去ったものと来たるべきものとのあいだをさすらう重い雲」について語ったことがある。少しずつ放電の起っている重い雲、「電光を孕んだ雲」が最近韓国社会で積もりに積もっている。「高所嶺^{こそりん}」、^{かんぶしや}「江雷者^{かんげい}」、^{スライン}「Sライン³」などと戯画化された初代内閣と青瓦台^{ちやんわたい}(大統領府)秘書陣。大統領職引継委員会^{大統領職引継委員会}が引き起こした「英語没入教育」、^{優劣班編成}「優劣班編成」、^{いわゆる0限目問題}「いわゆる0限目問題」、大統領が直接言及した「ビジネスフレンドリー」と各種の規制緩和、法秩序の強調、公企業の民営化(電気、ガス、水道、医療保険など)、国土全体を切り裂く大運河、そしてついに米国産牛肉交渉処理。

暗い前兆。新政府の新たな諸措置は大衆の「不安」を「より一層」増幅させた。「より一層」という言葉に留意しよう。なぜなら「不安」は以前の政府から既に存在していた。そしてその「不安」が李明博政府を生んだ。執政者たちが錯覚しているのは異なり、李明博政府を生んだのは、彼/女らの「力」や「能力」でなく、まさに大衆の「不安」だった。為替危機以降十年余りの間大衆は極度の生の不安に苦しめられていた。不安は、生の安定した構造が解体した事態、すっかり一つの「構造」として定着した永続的「再構造化(re-structuring)」、日常となった例外的時間など

た表情と対比される弱々しい守りの構え。

5. 壁の登場

しかし6月19日現在、最近のキャンドルデモにおいて壁は「壁」として再び意味を得つつある。ありとあらゆる戯画化の対象であった障壁、大衆に「文化遺産」扱いをされありとあらゆる嘲弄の対象であった障壁が、最近「壁」として再び意味を得つつあるように思われる。「壁を越えるべきか、越えるべきでないのか」が重要な論争の対象となった。重要なのはこのうち正しい答えはどれか、ではない。問題は「問い」そのものにある。なぜそれがそれほどまでに重要になったのか。

一方には壁を乗り越えれば長い間構築してきた名分(平和デモを含めて)が崩れ、度を越して政治化するという主張、さらには現政府を退陣させた後に対案がないという主張などがある。他方には壁に塞がれて四十日余りを路上で行進ばかりするなかで感じる無力感を主張する人々がいる。こんなやり方では何も得られないというのである。

「越えるべきか、越えるべきでないのか」という問いが先鋭化するなかで、壁は「壁」としての意味を持つようになった。どちら側の主張であれ、人々はそれを重要な「壁」として扱っているからだ。そして大衆は結果的に壁に閉ざされつつある。どの線まで運動を引っ張っていくべきなのか。あの壁を越えるべきか、越えるべきでないのか。分子的な大衆の流れに一つの巨大なモルルの線分が登場しつつある局面である。みな心のなかに一つの壁が登場しつつある。みな一つの創意的な突破口、一つの創意的な問いが切実な状況である。

ただ状況が切迫しているからといって度を越して焦る必要はない。真実の目で正直に闘った者たちに勝利は思ったよりも早く訪れ、喜びは思ったよりも大きい。万が一彼/女の闘いがある線に止まったとしても、彼/女は誰も過去へと引き戻すことのできない新たな地に立っているだろう。しかし進軍の速度が遅くなりある壁が予感されるときに当惑したり何らかの無力感に陥るならば、彼/女は思ったよりも早く敗北するであろうし、その悲しみはこの間彼/女が得たあらゆる喜びによっても埋め合わせのつかない負債を残すだろう。スピノザが論すように後悔したり怖れたりする者は常にその二倍を失うこととなる。心の余裕がいつもまして重要である。依然として、あるいは最後までこの闘いを楽しまなければならない。

わたしは一時友人たちが青瓦台へ向かおうとあがくの反対した。一体そこになががあるから向かおうとするのか理解することができなかった。その多くの大衆に大統領は会ってもくれないだろうし、会ってくれるにしたらここでこれといった妙案があるわけでもない。そのうえ権力がモノのように青瓦台のどこかに祀られているわけでもない。青瓦台に入るのも難しいが、たとえ入ったとしたところでどうしようというのか。むしろ瞬時の歓喜の後に訪れるその虚無感に耐えることができるだろうか。あのみっともない建物としばしば枝を揺るだけの松の木。その「何もなさ」に突然怖れが生じるのではないだろうか。権力の想像された場所に飛び込んだ現実的な行為がむしろある怖れ、例えば国がつぶれるかもしれないという怖れを生み、再びそれが巨大な保守反動の流れを生みはしないだろうか。

しかしこの全ての心配と憂慮が何だというのだろうか。そんなものはユーモアを知らぬ人々の杞憂ではなからうか。壁に多くの意味を与えずに人々、越えるかどうかで悩まずに人々、そんな真剣な人々においてその虚無感に恐怖へと変ずるだろう。もしそんなものはなんでもないとわかっているなら、鍾路の路上であれ、市役所前の広場であれ、たとえそれが青瓦台の庭園であれ、それがどうだというのか。

陳恩英は「裸の王様」という童話^{童話}についてのジジェクの解説^{解説}に実に適切な批判を加えている(『코문주의선언』)。ジジェクは王様が裸であるという事実を語る子どもの天真爛漫さが客観的な信の秩序を破局へと追いやったことを憂える。結局語ってはならないあることをだしぬけに喋ってしまうこと。しかし童話によれば、子どもの言葉は破局を生んではいない。王様は偽善的な行進を続けるほかに、大衆は笑い立てながら愉快な時間を送った。

誇張された恐怖、誇張された怖れ、誇張された憂慮は「未来の真実のユートピア」への誇張された希望ほどにもわたしたちのなかに厚い壁を築く。小康状態に陥った現状を怖れる必要もなく、ヘンな歴史主義の図式をここに投影する必要もない。ただ真の思いで、しかしまた楽しく進むのみだ。大衆がその権威的な象徴を前にして屈することなく明るく笑うこと

tion)」の特徴であると呼ぼうと思う。

「メディア」はそれぞれものとして直接的に投げ出された、そして自生的に動く節だ。それは一種の「中間」である。しかし二つの個体が存在し、その間にメディアが存在するのではない。メディアはあえて言うならリゾームのように成長する莖の節である。それは一つの場のなかで、支配的言語を通して何かを表象したり媒介したりするのではない。それは複数の場を貫通するやり方でその場を疎通させる。疎通するものと疎通されるものの区別が消えたもの。語るものと伝えられるものの区別が消えたもの。直接話法と間接話法の区別が消えたもの。それが「インメディアーション」の特徴である。

4. 革命の革命：バリケードは誰が張ったのか

媒介の失踪は代表の失踪に通じている。夕方に始まったデモが早朝になってようやく終わる理由のうちの一つは警察の感じるある困難とも関係がある。デモ隊には交渉をしてくれるようないわゆる「代表者」たちがいない。「狂牛病国民対策会議」というものが組織されているものの、誰もが知っているように彼／女らが何らかの統制力を行使するのは不可能である。むしろ初期にあった「(みんな一緒に)論争」は運動組織の「意識的指導」への大衆の反発、あるいはある統制可能性を示していた。

もちろん瞬間的な指導者や前衛はいた。ささやかなところでは大衆の行進中に幾人かの人々がそれっぽい意見を表明するとき、その大衆の流れは彼／女らの意見にあわせて経路を扒ぶ。六月初頭のある日の夕方、わたしの記憶によれば、前で大衆の行進を引っ張っていた人々が、鍾路と世宗路の交差点に設置された警察の壁に阻止されるや鍾路に座り込んで集会を行おうとそととき、後方の大衆は後ろへと移動し始めた。そして鍾路区役所の裏の道を通って青瓦台の方へと歩き始め、相当に多くの人々が彼／女らに従った。そして景福宮の近くで警察の壁にぶつかると一部は大学路へと進出しようとした。最近警察庁長がある場で明らかにしたところによれば、警察がこのようなデモの展開のゆえにどほど手を焼いているのかわかる (cf. 必ずしもデモ行進においてのみこのような様相が現れるのではない。最初に弾劾発議をした高校生、最初に乳母車を引いてやって来た主婦、アゴラ⁵で重要な意見を出している人々、誰もが大衆に一つの出口を提示する「一時的」指導者の役割を果たしている)。

わたしの考えではバリケードの存在が今回のデモほどに無視されたことはなかったように思う。むしろバリケードを張り立てたのも警察と青瓦台だった (いわゆる明博山城⁶)。誰がバリケードを張ったのかは重要な問題である。それは誰が攻撃的で誰が守りにまわっているのかを示しているからだ。しかしもっと重要な問題がある。それはバリケードがフランス革命以降永い間、あまりにも永い間蜂起と革命の基本モデルとなってきたからである。

いつだったかエンゲルスは「かつての革命が新たな革命の足を引っ張っている」と主張している(いわゆる革命を革命する問題を提起したことがある (고병권 『고주장 책으로 세상을 말하다』のなかの「革命」部分参照)。⁷ そのとき彼は明らかにバリケードモデルの持つ問題を一つ一つ指摘した。執権者たちの進歩した攻撃 (武力とイデオロギー) にバリケードはあまりに脆弱であるということ。しかしより深刻な問題はバリケードが代表の問題を誘発することだった。バリケードは常に代表を生み、彼／女らによる指導の問題を生み、代表はある時点を過ぎれば常に政府と妥協し大衆を裏切るというのである。そして彼はバリケードモデルを捨てて、より攻撃的な何らかの革命のモデルが作られねばならないと信じていた。彼はローマ時代の転覆党、つまり「キリスト教」の布教方式を自分の文章の末尾に示唆的に付け加えた。キリスト教は敵軍と戦う前に敵軍をまずキリスト教徒にしていたのである。エンゲルスの文章を参考するなら、現在登場している疎通と伝染の各種の武器、その小さく可愛い電子装備は銃剣よりも強力な影響を及ぼしているのは事実である。

これに比べればいわゆる「明博山城」は疎通ならぬ孤立と区画、統制の装置である。それは興味深いことにも没落しつつある米国がグローバル化時代にメキシコとの国境に設置したハイテク障壁と似た点がある。そしてそれは世界の主要諸国家において設置しつつある安全障壁 (犯罪からの保護という美名の下に設置された都市の保護障壁) とも似通っている。ウイルスやテロリスト、さらには統治者に反対する大衆の抵抗的な流れを防ぐ障壁の設置。ネオリベ諸政府の強がっ

が生んだ情緒であった。それはまた、共同体の「内部」にいるものの「保護」を受けることができないとき生じる感情、わたしたちの社会の内にいるもののグローバルな市場の暴力が直接にダメージを与えるという事実において感じる感情でもある。わたしたちに柵があるのか、わたしたちに政府があるのか、あの政府が果たしてわたしたちの政府なのか疑わしい事態。大衆はそこである「喪失感」を感じる。

大衆の感じる喪失感。それは直接的には所得の喪失、雇用の喪失を意味する。しかしもう少し踏み込んでみれば、そこには「生の安全保障の喪失」がある。現在の執政者たちはここ十年を「失われた十年」と呼んだ。しかし「高所嶺」「江富者」内閣が示しているように、喪失の意味は彼／女らと大衆には全く異なったものを意味している。新たな執政者たちがここ十年の間に何を失ったのかは知りようもないが、ともかく彼／女らは再び権力を取った。しかし大衆はどうか。彼／女らは依然として「知りようなく」「統制することもできない」ある力に生が委ねられているという不安に苦しめられる。大衆は自己の生を左右するあらゆる決定に何らの介入もできず、それがどのように進められているのかもさっぱり知ることができない。それが不安を引き起こす。

この重い雲がどれほど濃密になったのか。兆しはあちこちで捉えられた。非常に些細な出来事にも全体が揺らぎうという微。実際極めて強力な信号が4月6日に捉えられた。「アンダンテ」というハンドルネームを用いるある高校生が、あるインターネットのサイトが用意した「国民請願」欄に「大統領」弾劾請願をアップした。実のところありとあらゆる「アンチ」コミュニティが作られ、ありとあらゆる請願が乱舞する世態を念頭に置くと、これはそれこそなんでもない「お遊び」であったのかもしれない。署名の目標を一千万人と設定したのも、その弾劾請願のある非現実性を示している。しかし弾劾請願に同意したインターネット署名者は軽く百万人を越えてしまった。署名者の数が毎日十万人単位で増加し始めるなかで、事態が容易ならぬものであることを誰もが感じた。執政者たちを除いては。

重い雲が満ち満ちれば非常に些細な出来事も放電のきっかけとなりうる。そして小さな放電は凄まじい稲妻へと発展する。その小さな放電を引き起こしたのが「牛肉交渉妥結」であった。その妥結のニュースを耳にして、ブッシュに会いに行くところだった李明博は喜びの声を挙げたと伝えられた。しかしそれが放電を引き起こした。このような兆しが用意されていなかったなら、「牛肉交渉」について「以前の政府がやったことの後片付けをただけ」という言葉や、「狂牛病の危険が誇張されて伝えられた」という政府の言葉がこれほどの引き起こしはしなかったはずだ。

確かに以前の政府においても「牛肉交渉」は「スクリーンクォーター縮小」、「医薬品価格調整」問題、「自動車排気ガス規制基準」問題などとともに、「韓米自由貿易協定」推進のためのいわゆる「四大先決課題」のうちの一つであった。現政府の言うように狂牛病の危険も多少誇張されているかもしれない。とするなら果たして問題はどこにあったのか。執権勢力は課税／女ら自身が寄せ集めた重い雲、その暗い前兆の形成を見ていなかった。いや、見ることができなかった。まさにそのために4月30日に文化放送の「PD手帳」において「米国産牛肉の狂牛病危険性」が取り上げられた際の波紋を理解しえなかった。彼／女らが下した結論は「番組の奸計にひっかかった無知な大衆」というものだった。

もちろんこれはいわゆる進歩陣営の場合も異なっていた(鄭泰仁は京郷新聞の主催した時局討論会において、この問題について自分の感じた驚きをこのように語った)。

「さる5月2日に清溪広場に向いた際ショックを受けた。わたしが韓米自由貿易協定について五百回ほど寄稿・講演をするなかでその度ごとに狂牛病の話をしても全く受け入れられなかったのに一気に女子中学生によって突破されたのが驚きだった。…その次の発展過程はもっと驚くべきなのだが、大運河、民営化、KBSを守ることにまで議題が拡散した。」 (『경향신문』2008年6月18日)

本当にどうしてなのだろうか。狂牛病の危険性を彼があれほどまでに騒ぎ立てた際には全く受け入れられなかったのに今のこの事態は一体どうしたことなのか。実はこの事態はわたしたちにとって見慣れぬものではない。2002年に米軍の装甲車が引き起こした事故で「ミソン」、「ヒョスン」の二人の中学生が死んだときも同様だった。その事件はワールドカップ期間中に発生し、その事件を機に政府と米軍を糾弾していたデモ隊はワールドカップを応援する群衆によって逼迫を受けた。ワールドカップがその事件を呑み込んでしまった。ところがワールドカップが終わりその事件は再び光を浴びてキャン

ルデモが発生した。その際の対策委関係者が鄭泰仁と同じようなことを語っていた。「わたしたちがあれほど闘っているときには見向きもしなかった人たちが…」

大衆とは、メシアとはまさにそういうものだ。それを待つ者は出会うことができない。それは突然やって来る。それは予定された時間に来はしない。しかしあらゆる瞬間がそれに開かれている。

2. 広場に乱入した群集、彼／女たちは誰なのか

一言で彼／女たちは誰なのか。最初は幾人かだったのが突然黒山のように寄り集まった彼／女ら。彼／女らの一人一人を見ては、彼／女らが誰なのか、なぜここに来たのかを知ることはできない。彼／女らは一方では学生であり、主婦であり、労働者であり、失業者であり、老人である。然し他方で彼／女らはなにものでもない者たちである。彼／女らは自分の名前と職業を明かすときにさえも匿名の大衆としてそこにいるからだ。

しかし「彼／女たちは誰なのか」についての問いが不可能なわけではない。それはある面で可能な問いであるのみならず、必ず必要な問いでもある。それは大衆という流れにおける特異点に対する問いであるとき意味を持つ。特異点と普通点を区別すること。これが鍵である。まさそのため「参加者の多数は誰だったのか」という問いはさほどよい問いではない。単に数が多いということのゆえに大衆がその集合の特性を持つわけではない。

今回のデモで問題となっていた諸集団について考えてみよう。まず弾劾発議をした「アンダンテ」、そして初期のデモを特徴付けていた（女子）中高生たち、そして一名「乳母車部隊」の主婦たち。形式的な意味においてであれ、実質的な意味においてであれ、彼／女たちは既存の政治的市民権を持っていなかった人々である（河昇佑は京郷新聞の時局討論会において「女性と青少年が主体として立ち上がり「市民-になること」を体験したと指摘したが、意味のある指摘だ）。問題は、彼／女らが牛肉問題についての政治的な決定に何らの影響力も行使できない人々であるものの、またその決定に最大の影響を受けるほかない者たちであるという事実だ。青少年たちや乳母車部隊、彼／女らは狂牛病牛肉の危険に曝されているか、それに敏感に反応するほかない人々であった。

これもまた見慣れた風景である。昨年初、「非正規職保護法」改正問題を議論する労使政委員会の跛行事件の本質がそれだった。会議の場に乱入して会議を跛行させたキリュン電子、コスコム、イーランドの労働者たちの叫びは一つだった。なぜ非正規職の保護の問題を扱う場に実際の当事者である非正規職労働者は加わりえないのか。非正規職労働者たちが会議の場に乱入した出来事、それは決定の場に参席することのできる「資格を持ちえない者たち」の「権利要求」であるといえる。

事実こういった問題は実際「マイノリティ」一般の問題でもある。マイナー性は場そのものの性格によって規定される。つまりマイナーな闘争は場のなかで起こる闘いではなく、彼／女らを周辺化したり排除したりする場そのものに対して繰り広げられる闘いである。それはその場を規定する尺度の排他的性格に関わっている。ゆえにマイノリティたちの政治的闘争は、尺度や論議そのものの政治性を問題とするものとして現れる。根拠や代議組織を備え持つことのないままに根拠や代議機構そのものを問題とすると、彼／女らの闘争は根拠がなく諸機構の媒介を経ない直接行動、つまり乱入のようなものとして現れる。それは「媒介なき大規模侵入」の形をとる。これに関わって河勝彰は「ハンギョレ」の座談会でこのように語っている。

「市民団体に媒介されない運動が展開されているが、事実上既存の市民団体の役割と地位が終わったものと見られることでもある」（『한겨레』2008年6月12日）

問題はここ十年余りの間の韓国社会の変化、とりわけ「格差」の意味するものが「大衆のマイナー化」にあるという事実である。韓国のデモクラシーは最近になってぐっと「デモスを追放するデモクラシー」の形態をとっている。韓米自由貿易協定の推進過程においても克明に現れていたが、大衆は自分自身の運命を決定する事案から徹底的に排除されている。政府のテクノクラートと議会の議員たち、主流マスコミ、彼／女らが何らかのコンセンサスを形成し、それを通して

排除の政治を作用させる。つまり「合意からの排除」、「合意を通した排除」が作用しているわけである。ネオリベの下で多数の大衆は追放されし者、排除されし者という形象をしている。範囲の違いがあり程度の違いがあるものの、多数の大衆はそのような点でマイナーさを湛えていた。最も強烈な反応を示したマイノリティたちの行進が始まるやいなや、多くの人々が湛えていたマイナー性が沸き立ち始めたものと見られる。大規模な大衆の媒介なき乱入！それがこの事態の重要な特徴のうちの一つであると思う。

3. メディア：「im-media-tion」と「onoff-line」

「媒介がない」、「媒介されない」という言葉が最も強烈に浮かび上がったのは「メディア」の領域であった。メディアは単なる「メディアエーション」、つまり「媒介作用」をするにとどまらなかった。さしあたって一つの造語を造るなら、メディアは「メディアエーション」から「インメディアエーション（im-mediation）」へと進みつつある。つまり媒介からある直接行動へと変化しつつある。今回のデモで表に出た幾つかの行動のうちでメディアは「メディアアクション」であり、そのような点で「行動-メディア（action-media）」と呼んでもいいように思われる。

関ギョンベは今回のデモにおいてデジタル媒体がいかに活用されたのかを分析するなかでデモ参加者の類型を、参加者、記録者、分析者、伝播者に分けているが（민경배「X마스 트리처럼 점멸하는 민주주의」『시사IN』2008年6月14日）、彼の分類に従って今回のデモにおけるメディアの問題を考えてみようと思う。

- 1) 参加者：街頭で行進を直接繰り広げる者。しかし彼／女はただ歩いているのではない。彼／女は携帯電話の文字メッセージで他の参加者とコミュニケーションし、集会に参加していない友人や家族に状況を伝え、参加を促す（この点で彼／女が送信する文字メッセージや映像メッセージは状況の伝達ではなく触発であるといえる）。
- 2) 記録者：デモの周辺部に陣取ってデジタルカメラやビデオカメラ、ノートパソコンを活用して動画をリアルタイムでインターネットにアップする人々。デモの生中継。警察の採証【写真などの撮影-訳者】に対する逆採証（ここである視線の逆転が起こる。とりわけ警察が世宗路に設置したCCTVの映像はデモの状況を生中継する重要な画面でもあった）。とりわけデモを生中継するというのがどのような意味であるのかを考えてみる必要がある。それはニュースの画面などを通して事後に録画映像を見るのとは大きく異なっている。デモの生中継はデモを特定の物理的な場所を超えてネットワーク化する一つの方法である。生中継を見ていた人々が再びデモの現場に飛び込むことが、この生中継の特徴をよく示しているといえよう。
- 3) 分析者：記録者がインターネットにアップした写真や動画を判読して警察の暴力を告発し、集会に参加する際に必要な準備物や熟知しておくべき事項を整理してアップする人々である。また衛生写真などを通してデモ隊に、デモ隊と警察の移動経路を絶え間なく知らせる人々である。
- 4) 伝播者：ブログや掲示板を通して集会に参加した感想をアップし政府や警察の態度を批判する文章をアップしたりコピーしたりする人々。オンライン上で世論を造成するいわゆる「ビッグマウス」たちであるといえる。「もちろんこの四つの類型に属する人々が厳密に区分されるわけではない。参加者が記録者となり、家に帰れば分析者や伝播者の任務を遂行しもある。」

メディアに関わってもう一つ印象的な出来事は、「オン」と「オフ」、「サイバースペース」と「リアルスペース」の連結だった。わたしたちはそれを一つの不可能な造語、「onoff-line」という言葉で表現できるのではないかと思う。6月10日、わたしたちの話題となった一つの出来事があった。集会の司会者がオンライン上の大衆に向かって「青瓦台のホームページをダウンさせよ」という一つの指針を伝えた。これはデモがインターネットで生中継されており多くの人々が「オンライン」中であるということ为前提とするときのみ可能なことである。1、2分の間に青瓦台のホームページはダウンした。サイバースペースで起こったこの事実はすぐさまリアルスペースへと伝えられた。種の間の境界を飛び越えるウイルスのように、互いに疎通不可能な場を飛び越えたメディア。わたしはメディアのこのような作用もまた「インメディアエーション（im-media-